

# 子どもが作る町「ミニたまゆり」の取組み

田園調布学園大学子ども未来学科准教授・番匠 一雅

## ◆はじめに

大学は教育と研究を本来的な使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、現在においては、大学の社会貢献の重要性が強調されるようになってきている。当然のことながら、教育や研究それ自体が長期的観点からの社会貢献であるが、近年では、国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、言わば大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっているものと考えられる。

そこで、本学では地域貢献・交流の促進を目指して、「地域交流センター」を設立し、地域のボランティア資源のデータベース機能を有した相談窓口として効率的な貢献活動を実践している。本稿では、地域交流センターが取り組んでいる多くの地域貢献活動の中でも特に特色ある事業として位置づけられている、「子どもが作る町ミニたまゆり」について、その活動内容を紹介する。

## ◆田園調布学園大学の建学の精神

本学は、在校生 1200 人の小規模大学であり、福祉と保育の専門家を育成している。建学の精神である「捨我精進」を基調とし、時代の要請に対応できる柔軟な思考力と行動力のある人間性豊かな人材を育成し、地域社会・国際社会の福祉に貢献することを目的としており、これからの福祉を担う人材育成を教育目的として次の事項を教育目標として掲げている。

- 21 世紀の社会に対応できる人材の育成
- 社会福祉の基本を踏まえた人材の育成
- 地域社会に貢献できる人材の育成
- 人間を多面的に理解し、人間生活を総合的に支援する人材の育成

本学では、上記の教育目標を実現するために、次の教育方針を掲げ、これを“学びの 5 つのキーワード”とし、小規模な大学ならではのきめ細かい教育活動を推進している。

### i 少人数教育

少人数教育を徹底し、「アドバイザー制度」を中心に、担当教員が学生一人ひとりと積極的にきめ細かくコミュニケーションをとっている。

### ii 資格取得支援

各種資格の取得に向け、さまざまな受験対策講座を開設するほか、少人数制のグループ学習、学内模擬試験の実施、各種受験関連情報の提供などの支援体制を敷いている。

### iii 実習教育

福祉援助や保育の実際の現場を体験する実習教育を重視し、実践力を培う学習に力を入れている。

### iv 就職支援

学年ごとに就職指導スケジュールを立て、それぞれの段階に応じた進路アンケート、ガイダンス、就職模擬試験などのプログラムを計画し、就職決定まで一貫したサポートを行っている。常に高い就職率を誇っており、近年では 2 年連続神奈川県 No1 の就職率となった。

### v 貢献活動

公開講座をはじめ、多くの地域住民向け事業を推進するとともに、市内の施設などにおける本学学生のボランティア活動を支援する。また、国際貢献としてベトナムホンバン国際大学と大学間連携を結び、諸外国への教育活動に取り組んでいる。

## ◆地域交流センター

上記に掲げている、「v 貢献活動」を強化するために、平成 21 年度に地域交流センターを開設。大学周辺地域のボランティアニーズを収集し、教職員、

学生といった人的資源の地域活用を調整する役割を担うとともに、学生の経験や学習をステップアップできるプログラム開発やボランティアグループ・サークルの結成、公開講座・高齢者向けパソコン教室・留学生や障害のある学生への支援・震災被災地での支援活動など数多くの活動を企画・運営している。本稿で紹介する、「ミニたまゆり」も、地域交流センターが管轄している事業となっている。

#### ◆子どもが作る町「ミニたまゆり」の概要

「ミニたまゆり」とは、2005年から本学で開催されている、子ども向けのキャリア教育イベントの名称で、昨年度は2012年2月11・12日の二日間開催され、のべ2700人の来場者が訪れた。ドイツのミュンヘン市で行われている、ミニ・ミュンヘンと呼ばれる職業体験イベントを参考に、教育教材として改良を施し、本学が企画運営している。「ミニたまゆり」という名称は、本学の学生が通学に利用している最寄りの「新百合ヶ丘駅」「たまプラーザ駅」から命名されている。

イベントでは、大学内に80以上の職業（店舗）が用意され、この仮想の町の中で子どもたちが「労働」を体験し、「給料」を得て、「税金」を納め、お金を「消費」という一連の体験を通じて、町の営みを体験する。参加する子どもたちは、このような体験を通じて、社会の様々な仕組みを楽しみながら学ぶ事ができる。

「ミニたまゆり」に参加できるのは、主に小学生から中学生（5～15歳）となり、身内以外から自分の労働に対する対価を受け取るという体験は初めてとなる場合が多い。子どもたちは、「ミニたまゆり」の体験を通じて、保護者から与えられるお金と、自分が働いて得たお金の尊さが異なること、ひいては、お金の大切さ、ありがたさ、お金を稼ぐ両親への感謝の気持ち、限りあるお金を有効に消費するための工夫、納税の必要性や、使われ方についての理解など、お金にまつわる経

済感覚を実体験を通じて理解することができる。

また、町の生活を快適に過ごすための、清掃局や警察、町を良くする仕組みを考える市議会などのイベントが用意されており、人々の暮らしを快適に保つためには皆がルールを守らなければならないということや、町のルールや町の仕組みを考え、自分たちで町の暮らしを改善できるということを経験する。これらの体験は、高校生にもなると誰もが自然と経験し体得するものであるが、「ミニたまゆり」は、これらの経験を、小学生のうちから体験することができるイベントであり、これらの学習を楽しみながら、いつの間にか身につけることができる素晴らしい教材だと位置付けている。また、町の運営には、様々な仕事に従事する子どもたちが協力し合う必要がある。他者との連携・協力・相互扶助という経験により、社会性の醸成につながると考えられる。

#### ◆子ども会議の概要

「ミニたまゆり」の準備のために、月に1回のペースで地域の子どもたちを大学に招いて「子ども会議」を開催している。子ども会議では、子どもたちが町のキャッチコピーや新しい店舗を考えたり、料理を作る練習やお店の接客の練習・イベントに必要なカンバンや飾り付けの作成といった準備を行う。毎回100人近くの子どもたちが参加し、子ども独自の斬新なアイデアを発想してくれる。

子ども会議では、子ども市長の選挙が行われ、



写真1 ミニたまゆりで働く子どもたち

毎年、町の代表となる10人の子ども市長が選出される。子ども市長は、ミニたまゆり本番で、開会式・市議会・裁判・閉会式などの行事に参加するほか、外部からのゲスト（昨年度は、黒岩神奈川県知事、阿部川崎市市長、瀧峠麻生区区長など）との対談や町の案内、テレビやラジオの取材などの対応を行う。

子ども会議に参加すると、1日につき4ユリーの報酬が支払われ、イベント当日は一般の児童より1時間早く会場に入る事ができる。これは、参加者への報酬という意味のほかに、オープン直後は町にユリーが流通していないため消費者が不在となり、店を開いてもお客が集まらないという問題を解決する意味を持っている。

#### ◆地域通貨「ユリー」

ミニたまゆりの町の中で買い物をするには、「ユリー」という単位の地域通貨を利用する。1時間仕事をすると、銀行で8ユリーの給料が支払われる。その後、銀行の隣にある税務署で税金として4ユリー（税率50%）を納めた後、残った4ユリーを買い物や遊びに使うことができる。ユリーのデザインは、子ども会議の参加者から募集したイラストを元に学生スタッフが作成する。



図1 イラストを基にした紙幣のデザイン

#### ◆市議会

ミニたまゆりでは、市議会が開催され、子ども市長を代表とした子どもたちが、町の生活をよくするために、どうすれば良いか話し合いが行われる。その中で、町のキャッチフレーズでもある、「ゆめかがやくみんなの町」をヒントにして「将来夢を叶えるためには、子どもは何をするべきか?」という議題が話し合われた。はじめに、参加者が将来なりたい夢を発表し、その目標に向けて何をすべきか意見を出し合った。最後に、それらの意見をまとめ、町の公約として採用した。

#### 子どもの町の公約(こうやく)

**おとなになったら、たくさんの“ゆめ”が  
かなえられるように次の事をやりましょう。**

“ゆめ”をかなえるために、たくさん努力(どりよく)をしよう

努力をしている人がいたら応援(おうえん)してあげよう

かなえたい“ゆめ”をたくさん考えよう

色んな“ゆめ”を考えるために色んなたいけんをしよう

“ゆめ”をあきらめないようにしよう

けんこうに気をつけて、長生きしよう

**おとなになったら、たくさんの“ゆめ”がかなえら  
れるようにがんばってください。**

子ども市長

図2 市議会で決定した町の公約

#### ◆黒岩知事・阿部市長の訪問

昨年度のミニたまゆりでは、神奈川県黒岩知事や川崎市の阿部市長が視察に訪れ、子ども市長との対談が実現した。黒岩知事との対談では、子ども市長からの、「知事に立候補した理由を教えてください?」「知事の仕事で大変な事は何ですか?」「子どもの町を見てどう思いましたか?」などの質問に答えていただき、黒岩知事から町を運営するためのアドバイスをいただいた。



写真2 黒岩知事と子ども市長

その後、子ども市長の案内で子どもの町を視察した黒岩知事は、町の仕事を体験し支払われた給与で射的などの遊戯を体験した。



写真3 町の仕事を体験する黒岩知事

#### ◆ミニたまゆりの成果

2005年から7回開催されているミニたまゆりは、回を重ねるに従い、参加人数が増加している。現在では、大学周辺の複数の団体がミニたまゆりに協力しており、大学を中心とした地域全体で開催する川崎市北部の恒例イベントに成長している。参加児童の保護者へのアンケートからも、98%の方が来年度も参加したいと回答しており、自由回答欄でも「子どもの頑張る姿に驚きました」「仕事やお金の大切さを理解してくれたようです」「税金について家族で話し合いました」といった感想が多数寄せられミニたまゆりの活動が、子どもの社会性の育成、キャリア教育に役立っていると考えられる。

#### ◆ミニたまゆりの教育効果

1年生の必修科目である、「福祉マインド実践

講座」では、社会福祉の担い手としての福祉マインドを育成するために、数回のボランティア活動への参加が義務付けられており、ミニたまゆりへの参加も、そのボランティア活動のひとつとして必ず参加することになっている。「ミニたまゆり」を単に机上で企画したりするだけではなく、こども会議や当日の運営などの実践を通して学生同士や教職員を始めとして、地域の子どもたちや大人たちとコミュニケーションを図り、様々な困難を乗り越えながら、ミニたまゆりの活動に取り組むことにより、大学の講義では得ることができない多くの教育効果が得られると考えている。

事実、コアメンバーと呼ばれる、ミニたまゆりを中心的に運営する学生スタッフは、1年間の活動を通じて成長し、プロジェクトマネジメント、コミュニケーション能力が大きく向上している。

#### ◆今後の目標

ミニたまゆりでは、参加者の声を徹底的に分析し地域の方々の要望に沿ったイベントになるよう改良を重ねてきた。その甲斐があつて、回を重ねるごとに参加人数が増えており、近年のアンケートではイベントに対する満足度が非常に高くなっている。イベントへの参加団体も増えており、名実ともに川崎市北部に根付いた恒例イベントに成長している。

今後のミニたまゆりでは、川崎市北部の他の大学や小中学校と連携を組み、本学が中心に運営しているイベントから、地域全体で運営するイベントに成長させたいと考えている。また、ミニたまゆりについて、運営方法に関して、他の団体から問い合わせを受けることが増えており、他の地域への波及の可能性も出てきた。将来、ミニたまゆりで得られた運営ノウハウを、他の地域に提供し、地域活性化の実践モデルとして普及する事を目標として、本活動を継続していきたいと考えている。